障碍をもつ幼児の保育(9)

―この子と出会ったとき―

津守　真(M)
津守　房江(F)

手を使うこと　その四

F　以前から私は、手がコミュニケーションにどのような役割を果たしているかを考えたいと思っていました。手のコミュニケーションと言うとすぐに手話とか、その訓練に発展しやすいのですが、そうじゃなくて言葉がなくても手や体で心が表せるのではないか、現にやってるんじゃないかと思い、そこを取り上げてみようと思っています。

また小さな孫のことになりますけれども、声の代わりにだんだんと手がよく利くようになってきて、あんまりはっきり指さしをするので、その指さしはどういう意味があるんだろうかとか、それから最近になったら人の手を取って自分のやってもらいたいことをやら

せるというようなことが出始めてきたんです。そのあたりをちょっと話してみてください。

言葉の前のことば

M　言葉を話さない愛育養護学校の子どもたちが心の中でどんなにいろんなことをいっぱい考えているかっていうことはずっと思ってはいたんだけれども、最近になって私どもの家に生後一年の赤ん坊が来るようになって、その子を見ていると、言葉を話す以前にいろんなことを手でしゃべってるということにいま気がついています。私が前に思っていたよりももっとずっとそうだということにいま驚いています。

F　そう、言葉の前のことばっていうことを実感としてとらえましたね。

M　うん、その赤ん坊に接して、言葉を話さない障碍をもつ子どもたちがどんなにたくさんのことを心の中で考えているかということをとてもはっきりと分かったような気がするんです。昨日その赤ん坊が私どものところに来たときに、その子があなたの手を取り、自動車を描いた絵本の上にその手を持っていきましたね。そしておばあちゃんに読んで欲しいっていうみたいに顔を見たんです。それであなたが自動車のところを読み始めた。読み始めたっていうかお話をし始めた。この頃この子は自動車をとっても好んでいて、外に行っても自動車をじっと見るし、特にタイヤを気を付けて見ます。それから自動車の絵本を自分は見てるんだということを得意気に示します。それだけじゃなくて、人の顔を見て、ここを読んでくれっていうふうに指で示すんです。それはこの頃とっても顕著なことなんです。

F　そこで私はその本を読んで「ブーブーブー」とか「赤いブーブーがいたね」とか話してあげる。赤ん坊は言葉なんて全然なしで、ただ私の手を握って「ほらっ」ていうように自動車のタイヤのところに私の人

差し指を持っていくんです。そして「ね？」っていうような表情をするのです。そうすると私も自然にブーブの話をしてあげることになるんですよね。それは意識しないでいて、子どもが興味を持ってる対象に向かう気持ちとそれを私にも一緒に共有しようよって誘いかけてるように自然にそういうふうになって、それに受け答えることになるんですね。それがとても私は不思議でした。

M　私もね、この子とよく道路を手を引いて歩くんだけど、この子は自動車のことをいっぱい知ってるんです。何を知ってるかっていうのはいろいろあるんだけれども、例えばいつも停まってる自動車のタイヤのところに行って自分が手に持ってきたミニカーをわざわざそのタイヤの隙間の中に落とすんです。もちろん停まってる自動車ですよ。そして僕がその玩具のミニカーを探してその子に渡すと、またその自動車をタイヤの隙間に落とす。それから家の近くの道路に自動車が通ると緑や赤のランプがついたり消えたり点滅する標識があるんです。それを手でさわって僕の顔を見る。つまり自動車が通ると標識が点滅するんだよと知らせるんです。「あーあー」とか「うー」とか言うだけだけれど、この子はいっぱい頭の中で思っていることがあって、ほらここんところはこうなるんだよ、ああなるんだよ、と言って説明してるように私には見えるんです。

F　何回か前に、物を手でつかむことが自我の発生につながるっていうような話をしましたけれども、物と自分だけじゃなくて、そこに第三者がもう一人介在して、一緒に「すごいねー」っと言ったり喜んだり共感したりする、それが言葉を広げ、思いを広げていく元になっているんじゃないかなって思いました。それはどうでしょうか。

M　言葉を話さなくてももうすでに子どもは話したいことがいっぱい心の中にある。で、それをどうやって相手に知らせるかっていったら言葉ではなくて絵本の上に人の手を置いて顔を見るっていうような、そうやってその思いを伝えようとしている。赤ん坊の成長というところを見ていて、なんだかすごいもんだと思うんです。

子どもが手や体で示すことを大人は想像力と繊細さで理解する

F　そうやって考えてみるとね、愛育の子どもたちは言葉を話せない子がほとんどだけれども、その子どもたちと一緒にいるとなんでもだいたい分かってしまう。複雑なことは分からないかもしれないけれどもだいたい分かってしまうっていうことをちょっと頭に思い浮かべて、私たちは当然のようにして過ぎてきたけれども、大切なことだと気が付きました。たとえば、ひとりの子どもが鍵のかかったドアのところへ私の手を持っていって、ここ開けろっていうようにガンガン叩いていたら開けてあげたいと思う。それから鍵がなくて「困ったなあ」って多少大げさにポケットの中に手を突っ込んで、「ほらないでしょう」っていうようにすると向こうも「困ったなあ」って一緒に困っていたり、そういうことがいろいろあったのを思い出します。

M　鍵がかかってるところをドンドン叩くのは、「開けてくれよ」って言っているというふうに僕らはすぐに考える。そしてドアを開けたら次は外に飛び出してしまうだろうというふうに先取りして考えるけれども、実はその中間にまだいろんなことがあるんですね。鍵を開けると向こう側にいろんな物や道具がある。もし子どもが言葉をしゃべったとしたならば、そんなことがいろいろあるに違いない。そこまで僕はいままであまり考えなかった。すぐに開けていいんだろ

うかと迷ったり、「開けろ、開けない」だけに集中して考えていたけれども、その中間にその子のいろんな思いがたくさん詰まっているのだから、まずそこのところを考えなくてはいけないんですね。前には見落としていて新たに発見したのはそういうことなんです。

F　私もその考えには賛成だし、ああなるほどと思いました。やってあげるかやってあげないかそのどっちかかと思ってしまうけれども、もっと複雑にいろんなことを子どもは手でもって、また体全体で表現し大人に訴えている。だからそれに対して繊細に応えなくてはいけないんだなと新しく気が付いたわけですね。

M　つい二、三日前のことですが、僕と一緒に隣の幼稚園に遊びに行く子がいるんです。その子は他の子どものロッカーのところに行って、私の指を名札のところに持っていって指さしてその子の名前を読ませるんです。そしてロッカーの中に手を突っ込んでみる。それから隣のクラスに行ってまた同じようにやるんです。私は気が気じゃなくて、もし他の子どもの持ち物をその子が持ち出したりひっくり返したりしたらどうしようってことが先に立ってしまう。ところがその気持ちをちょっと抑えてその子と一緒につきあってみると、僕に名前を読ませるのは今日お休みの子なんです。隣のクラスに行った頃になってはじめて僕はそのことに気が付くんです。鞄がぶら下がってないところの子はお休みで、その子のところに僕の指を持ってって名前を読ませる。誰が休んでるかっていうことを、そうやってその子は確かめている。いつも来ているあの子、この子がどうしてるだろうかっていうことを考えてるのかもしれない。ああ、そんなことを考えていたのなら、ロッカーの前で僕はもっといろんなお話をすることができなかっただろうかと考えてしまった。そういうことはまだまだいろいろある。

F　本当にそう言われてみるといろいろあってロッカーのところに行ってお弁当の袋をいじっていたら

「お弁当が食べたいの？」って言う。「時間はちょっと早いけれどもお腹がすいたんでしょう、お弁当食べる？」なんて言って出してあげるとか、それくらいまでの理解はあるんだけれどももっと複雑なことを言ってるのかもしれない。「今日は好きな食べ物なんだ」とか考えているかもしれない。「食べる？　食べない？」って言ったり、「早いんじゃない？　遅いんじゃない？」とかっていう。そんなことばっかり実用的に考えてしまったけれどももっと豊かなものがロッカーのところへ行ってお弁当の袋を触ったということの中にあるんでしょうね。それにやっと気が付いたのですね。

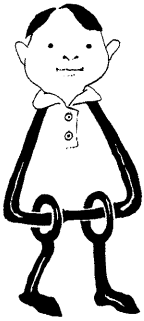
M　その通り。本当にもっと複雑ないろんなことがいっぱいあるだろうということが、いまだったら僕はもっとよく分かる。だけど、その時には思いつかないんですね。

F　大人はもっと豊かに想像力をめぐらせなければならなかったんだということに思い至ったんですね。そうしてみるとずいぶん頑張ってよくつきあったなあと、一人一人のことを思い出しますが、頑張ってつきあわなきゃならなかったのはそれだけあんまり理解しないでつきあっていたから頑張らなきゃならなかったのかな。その点はどう思いますか。

M　それはね、その通り。その通り。もっと想像力を広げて考えれば別のつきあい方が出てきたんじゃないかということを考えますね。

手と顔の表情に興味をもつ

M　ずいぶん前のことだけれども一人の男の子がいつも「あーあー」って言って声を出して歩き回っていました。その子が、ある時じっと座って絵本を見ていることがあったんで



すね。その絵本を私も一緒に座って気を付けて見ているうちに気が付いたことは、それは手を描いた絵本だったんです。何か一つのものができあがるまでを、一、二、三、四というふうに順序よく連続写真が撮ってあって、手と指の写真がのっている図鑑でした。私はいつもさまよい歩いてるように見えたその子が手の写真をこうやってじっと見ているのは、よほど手に関心があるのだろうと思って、マジックペンを出すと、その子はそのマジックペンでいろんなものの上に色を塗り始めました。河原で石を拾ってきたらその石にその子はいろんな色で塗って、一つの石がまるで宝石のようにキラキラ輝いて、お母さんとお父さんが「この子こんなきれいに色塗って宝石みたいだ」って言ったらますます喜んで、しばらくの期間石に色を塗るっていうことをその子はとてもやったんですね。そうやって、私がその子の手に気が付いたときにこんな面白いことが次々に開けていったんです。

F　その人は何でそんなに「手」に興味を持ったのかしら。「手」を使いたいと思ったのかしら？

M　それもあるだろうし、何で手に興味を持ったのかってのはたった一つや二つのことじゃなくていろんなことがあったと思います。いまだったらさっき話したようにその子を取り巻くいろんなことを考えたでしょうね。

F　あの子はよく人の手を引っ張って連れ歩いていましたね。

M　その子は僕を呼びに来て、顔をじっと見て、それから顔を隠して「いないいないばー」をしました。

F　顔の表情に興味があったんでしょうか、その子は。

M　それもその通り。手の写真と同時に顔の写真にも興味をもった。顔の表情の変わる写真にもとても関心があった。

F　それは普通には本で見て学ぶというよりも、人の

顔を見て自然に学ぶことだけれども、その子にとっては本で学ぶ事柄だったのかもしれないわね。

M　本だとはっきりいろんな表情が見える。それによって実際の人の顔を見たときにもいろんな表情があるということに気が付いたのかもしれませんね。

F　なるほどね。表情からその人の考えていることを学ぶのでしょうか。

M　そのことは手に対する関心だけじゃなくて、つまり人に対する関心だったのですね。私の家に来る赤ん坊のことを考えても、こうやってあなたの手を引っ張って本の上にのせたときに、そのたびにあなたの顔をその子は見る。この人は自分のことを喜んでくれてるのか、自分のことをどう思ってるのかというように顔を見るんです。そして手を絵本の上にのせる。これは言葉であらわすと難しくなるけれど、実際にはとても単純なことです。

指さしについて考える

F　話は元に戻りますけれども、指さしについて、自閉症と言われる人たちにとって非常に意味があることとして論じられたことがあったでしょ。指さしをすると言葉が出るとか、人に関心があるとかそういうことが言われたことがあるけれども、あなたはそれをどういうふうにとらえてるんですか。

指さすときには、自分と対象になるものとの関係をとらえるだけじゃなくて、そこにもう一人共感する人が必ず生じてくる。そうしてそこで人間同士（自分と親しいお母さんなり先生なり）が共通にそのものに対して気持ちが向かうことが大事だと思います。そしてただ自分が物を見つけその物をつかまえるっていうだけじゃなくて、もう一人の人もそれに関心を持ってるだろうと子どもが思う。かなり幼い子どもがそう思うっていうことが非常に不思議なことだし、本当にそ

ういうふうに発達するのかって思っていたら、うちの赤ん坊がブーブの絵を見るだけじゃなくて、一緒に私の手を持っていって「これ見てよ」っていうようにすることになってきたので、三つの頂点を持った三角形の関係かなと思ったんです。

M　確かにその通りでしょうね。「指さし」は、「指」ってところに強調点があるけれども、指は単なる指じゃなくて、子どもの心の全体がそっちに向いてるということでしょう。その子は指さす前にね、天井に輝いてる電灯をじーっと見るというところから始まったんじゃないかしら。そしてそれからしばらくたってからそこに指が加わったというか、それをまたこちらも一緒になって「あ、これね」なんて言ってね。いまあなたが言ったように共感しながら、手を上げたり指を上げたりしてる間にその子は今度ははっきりと指さすようになって、それから自動車の絵本を持ってきて、今度はここは指さしじゃなくってあなたの手をそこの自動車の絵の上に置いて、そしてそこをお話をしろって言う具合に促していたんですね。そこがなぜ指なのかっていうところはすぐには僕は言えない。心が向いていたっていうところははっきりしてる。

F　そうそう、だから指さしをするかしないかが、まるで言葉が出るかでないかの別れ道のように思う必要はなくて、外界に対していろんな関心があるかどうかってところが大事なんじゃないかなって思うんです。だからお母さんたちが「この子は何にも指さししないから大変だ」って思うんじゃなくて、いろんな物に関心を持つようにして、電気がついたら「あー、電気ね」って一緒に言ったり、今度は電灯のスイッチを消したら「あら、消えちゃったわ」とか「あら、ついたわ」とかって言って一緒に楽しむ。そうするとそれ

はとても子どもの気持ちを開く。デリケートで人に対して開きにくい気持ちの子どもだってあるわけだから、子どもと遊びながら見ていることが大事なんじゃないかなって思ったんです。指さしをするかしないかっていうそういうことではなくて。

M　それは僕も賛成です。その指さしをするときにも、大概の子どもはその前に「近寄って来る」というところがあります。

F　ああ、なるほど。

M　指さす前に「近寄って」来たっていうことは、その子がその人に関心があるだけではなくて、その人に何か話したいことがあるときじゃないかと思うのね。その近寄って来たときにすぐにそれを断わらないように僕は非常に気を付けなくちゃいけないと思っています。近寄って来たっていうことがね、もうすでにお話をしてるということの門口なんじゃないかしらね。

F　デリケートな子どもはそういうふうにおそるおそるしているし、自分の気持ちをむき出しに出すなんてそんな恥ずかしいことは嫌だと思っているから、みんな隠しながらそれをやるもんだからこっちも受け取りにくいし分かりにくいんです。隠しながらでもそこまで近寄って来たらそれはずいぶん大事なことなんですね。

M　障碍をもつ幼児の保育というテーマで手のところをやってるわけだけれども、障碍をもつ幼児は、いまあなたが言ったようにとても繊細な子が多いからそれを隠しながらおずおずとやっているので人の目に付きにくい、それをちゃんととらえて、こちらも自分の向きを変えて応えていくというところが、いま手の話からよく分かったような気がします。